

渋沢栄一著、草柳大蔵解説「論語と算盤(そろばん)」大和書房 1992年4月15日刊を読む

渋沢栄一の「わが青春」 - 「自己定位」の出来た人 -

1. 渋沢栄一は天保 11 年(1840 年)2 月 13 日、武蔵国榛沢郡血洗島(現在、埼玉県深谷市血洗島)に生まれている。昭和 6 年 11 月 11 日没、91 歳と 9 か月という長寿であった。
2. 生家は、農業・養蚕・藍玉商を兼ねて裕福であったが、父の市郎右衛門の代には荒物商や金融業まで営み、地方の資産家として頭角をあらわしていた。しかし、家庭の躰はきびしく、栄一は 6 歳のときに三字経の手ほどきを父から受け、一年あまりのうちに孝経、小学、大学、中庸と進み、ついには論語にまで及んだ。7 歳のときから隣村の尾高藍香につき、四書・五経をはじめ左伝、史記、漢書、国史略、それに日本外史を学ぶ。当然、読書力が身について、11、2 歳のころには「通俗三国志」「里見八犬伝」を読破するに及んでいる。
3. 現在、幼児の「早期教育」の是非が論じられているが、幕末から明治の中頃まで、中産階級の家庭での教育には、このような自前の「素養注入教育」が行われていたのである。
4. 渋沢は、また、12 歳のときから神道無念流を学んでいる。本書の中にも、健康の秘訣として「下腹に力を入れる」話が出てくるが、子どものときから撃剣を通じて身につけた「腹式呼吸法」が活力源であったことは疑いを容れぬところであろう。
5. 16 歳で、精神革命を味わう。父の名代として代官所の呼び出しに出赴くと、五百両の御用金を申しつけられる。「父に相談してから」と返事をすると、代官は真っ赤になって怒り「お上の御用をなんと心得る。そのぶんには捨ておかんぞ」と、どなりつける。帰りの道すがら、栄一は考える。「あんなくだらない人間でも、ただ侍というだけで大きな顔をし、人の金をもらうのにさえ威張りちらすのは、結局、幕政が悪いからだ、階級制度が悪いからだ」
6. 23 歳。尊皇攘夷討幕運動に立ち上る。文久 3 年(1863 年)、ペルリ提督の率いる黒船が浦賀に姿をあらわしてから 10 年目である。物情騒然たる中を、栄一は同志とかたまって、高崎城乗っ取りと横浜焼打ちを計画、69 人の仲間をあつめ、槍や刀を江戸から取り寄せて蔵に蓄えもした。この一件は、十津川郷土の惨敗ぶりを見聞した同志の一人(尾崎長七郎)の必死の制止で事無きをえたが、栄一の討幕思想に変更はない。
7. 元治元年(1864 年)上洛した渋沢は、一橋家の平岡円四郎の推挽により、慶喜の家臣になる。百姓から一躍士分にとりたてられたわけだが、一橋家が代々尊皇の家柄であるという事情が栄一に矛盾感を起させなかった。出仕のあと、「歩兵取立御用」という役目をおびて農兵募集に大手柄を立て「御勘定組頭」に出世する。食禄 25 石 7 人扶持、滞京手当月額 21 両というから、そういう待遇である。

- 8 . 慶応 2 年、主人の徳川慶喜は第 15 代将軍となる。もともと討幕派であった渋沢は「余は失望落胆、不平、不満やるかたなかりき」という状態で、煩悶のすえ、元の浪人に戻る決心をする。ところが、彼が辞去しようとした矢先、慶喜から弟の昭武のフランス訪問に随行せよとの下命をうける。
- 9 . 慶応 3 年 1 月 11 日、徳川昭武以下総勢 29 人は、フランス船「アルヘイ号」に乗船、横浜港を出航する。その甲板上に渋沢栄一の姿があった。栄一は、この洋行で彼自身を大きく変革させた。3 つのモメントがあった。第一はフランスには日本のような「官尊民卑」の思想がないことだった。「お武家様」である陸軍大佐が「町人」である銀行家に一目も二目もおいているのだ。第二は、銀行家フロリヘラルドによって教えられた「株式組織」による経営法である。大衆の金を集めて事業を経営し、それによって大衆を富ませる方法を知った彼は、帰国後、「合本法」という名でこれを実行に移している。第三は、ベルギーの国王レオポルド一世から「これからの国家建設には鉄が必要だから、日本もベルギーから鉄を買っていただきたい」と、商人のような申し入れを受けたこと。
- 10 . 明治元年 11 月 16 日、帰国。日本はすっかり変わっていた。徳川幕府は倒れ明治新政府が誕生している。渋沢は静岡藩から「勘定組頭」を任命されたが、落魄の主君である慶喜から禄を食む気になれず、明治 2 年 2 月、日本最初の株式組織による「商法会所」を静岡に開業する。ところが、事業(定期・当座預金、米穀・肥料の売買、製茶・養蚕などへの融資)がようやく緒につきかけたとき、東京の新政府から「租税正に任ず」という辞令を受ける。その気はありませんと固辞するが、大隈重信の弁舌に負けて、明治 2 年 11 月、大蔵省に入る。栄一はここで租税制度、貨幣銀行制度、度量衡制度を改革して実績を挙げ、藩閥政府の中でも"実力者"として一目おかれるようになる。位も大蔵少輔事務取扱い(次官)まで栄進した。が、明治 6 年 5 月、大久保利通との間に軍事費をめぐる対立、さらには各省の予算増額要求と摩擦を起して、蔵相の井上馨が辞任するに伴い、その位置を去る。彼が、実業界に飛び込むのは、このときからである。
- 11 . 以上が渋沢栄一の「わが青春」である、要約してみれば「変転きわまりなき」という言葉であろう。しかし、渋沢が環境の変化にふりまわされたということはできない。討幕・出仕・洋行・新政府官吏と、まるで異なる立場に立ちながら、彼はその場その場で全力を尽して事に当たっている。けっして、自分を見失っていない。権力の部品にもならなければ、状況に埋没してもいない。いわば、彼自身の「自己定位」が出来ているのである。その秘密を、読者はおそらく本書の中に読みとられるであろう。論語にかぎらず、漢籍からの引用も自由自在なら、「円いものほど転びやすい」など俗諺にも通じている。その魅力を探るのも読書の楽しみではあるまいか。

[ コメント ]

以上は、草柳大蔵先生による、本書「論語と算盤(そろばん)」の著者である渋沢栄一先生のビジネスを始めるまでの御経歴である。実によくまとまっているので引用させて頂いた。この文章を熟読した上で本書をお読み頂き、自分が今しなければならぬことをお考え頂ければ幸いだ。また、

人間の能力開発には年齢は関係がない。たとえ 6 歳の少年にも課題を与え自覚を促せば、相当の学習が可能である。外国に行き学ぶことの大切さもよくわかるのが本書だ。何のために、また、誰のために学ぶのかを考えるとときにも本書は参考になる。6 歳からの漢文学習を通して身につけたことばの力、言語力と、12 歳から学び身につけた神道無念流が人格形成と一生にわたる活動の基礎になったものとする。名著、古典、日本国民必読の書といえる。

- 2012 年 4 月 29 日 林 明夫記 -